

昭和57年の吉野弘さん(家族提供)

狭山を愛した詩人

生誕100年

吉野弘の世界をたどる

今年生誕100年を迎える、詩人の吉野弘さん。結婚披露宴でよく引用される「祝婚歌」や、国語の教科書に掲載された「I was born」「夕焼け」など、数多くの名作を遺しました。狭山市で過ごした35年間の暮らしの中での自然や人々との交流が、作品に色濃く息づいています。今月は、吉野さんの足跡をたどりながら、詩の世界を感じられるスポットなどを紹介します。

うつつの持主は

うつつもどつとも

われにもあらず受難者となる。

何故って

やさしい心の持主は

他人のつらさを自分のつらさのように

感じるから。

やさしい心に責められながら

娘はどこまでゆけるだろう。

「夕焼け」より一部抜粋

次ページ 吉野弘さんの生涯





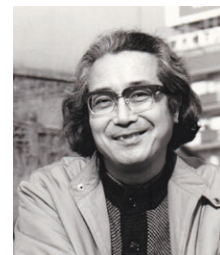
▲昭和62年 狭山時代の自宅の書斎(家族提供)

詩集『北入曾』

昭和47年に狭山市に居を構えた吉野さんは、静岡県富士市に転居するまでの35年間、詩の創作だけではなく、校歌の作詞や文芸誌の編集などにも積極的に取り組みました。昭和52年、狭山市に来て初めて刊行された、吉野さんの代表作とも言える詩集『北入曾』には「茶の花おぼえがき」をはじめ、狭山での日常や自然を表した作品が収められています。詩集の題名に地名を用いることは大変珍しく『北入曾』は吉野さんの狭山への愛着がとても感じられる一冊です。



▲詩集『北入曾』(吉野弘/青土社/昭和52年)



▲昭和57年の吉野弘さん(家族提供)

詩人・吉野弘

大正15年1月山形県酒田市に生まれ、戦時中に酒田市立商業学校を卒業して帝国石油に入社しました。激務がたたなり、昭和24年に肺結核を患った吉野さんは入院中に詩人・富岡啓二さんと出会います。この交流がきっかけで本格的に詩作を始め、勤務の傍ら詩の投稿をしたり、詩の会に参加したりしながら、31歳で初めての詩集を刊行しました。吉野さんの作風は、何気ない日常の中で生きる人間の弱さや優しさ、温かみを描くものが多く、狭山で創作した詩では自然に関することもよくテーマとしています。詩作の他にも、地域の講座や校歌の作詞、文芸誌の編集にも尽力し、地域に深く根ざした詩人として活躍しました。



▲長女・奈々子さん8歳、次女・万奈さん0歳(家族提供)

次女・万奈さん誕生。コピーライターに転職し昭和55年まで継続。その後は文筆を専業とする

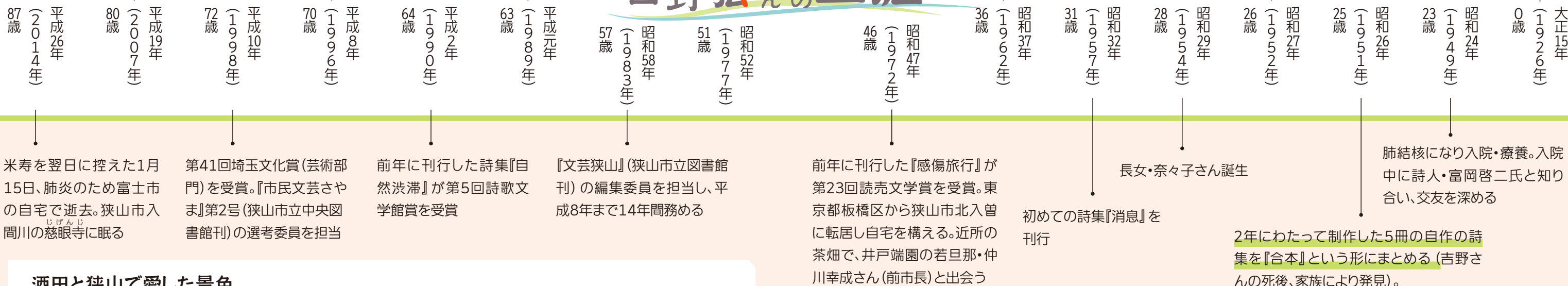
詩誌『詩学』に「爪」[I was born]を投稿し、翌年の2月号で新人に推薦される。以後、同人誌『権』の他、各種の雑誌、新聞などに詩や書評を発表する



▲1939年(13歳) 酒田市立商業学校2年生のとき(家族提供)

1月16日、山形県酒田市で出生

吉野弘さんの生涯



酒田と狭山で愛した景色

吉野さんは茶畑とケヤキ、富士山を特に好んでいたそうです。狭山市の自宅からは茶畑とケヤキの木を眺めることができ、富士市の自宅では富士山が見えるように窓を設けたといいます。幼少期から31歳までを山形県酒田市で過ごした吉野さん。酒田市にある琢成小学校の校歌も作詞しており、鳥海山や最上川などに囲まれ、自然に恵まれた風土の中で育ったことが、この歌詞の中にも表れています。酒田市での「緑の田んぼが広がる向こうに見える鳥海山」という景色と狭山の「緑の茶畑とその向こうに見える富士山」という風景が故郷と重なり、狭山の景色、そして後の富士市における富士山の眺めも気に入っていたのではないのでしょうか。



▲鳥海山(さやま吉野弘の会提供)

5冊の手書きの詩集をまとめた『合本』

吉野さんは帝国石油に勤務していた昭和22年から詩を書き始め、入院前の2年間で『體臭』『山巔』『鶏肋』『のすたるぢや』『道』という5冊の手書きの詩集を作りました。これらの詩集は、会社の「支払金内訳書」などの事務用書類の裏面に、ペンや鉛筆で書かれたものです。昭和26年にこれらの手描きの詩集を1つにまとめて『合本』として吉野さん自身の手で製本されました。病後、半日勤務の生活を送りながら作られた『合本』は、吉野さんの死後に家族が書斎で発見したもので、大切に保管されてきた吉野さんの若き日の情熱あふれる貴重な作品です。



▲左「賦すさくらんぼ」25ページ、右「書斎」7ページ(家族提供)

次ページ 市内にある吉野さん縁の場所とエピソード

★慈眼寺(入間川1-9-37)

吉野さんの墓所があり、自身の詩「草」「いのち」が刻まれている詩碑があります。

狭山市駅周辺

▶墓所に刻まれている「草」
草は地面から伸びるため、
この詩はあえて下揃えにな
っています



◀「いのちは」が刻
まれている詩碑
(MTW提供)

■優しさの奥に凛とした一本筋のある方でした

優しく穏やかな吉野さんは、言葉
を大切にする几帳面な方で、寺
報を送るとすぐに感想を寄せて
くださいました。吉野さんが寺を
訪れると長く語り合いましたし、
ある時はこどもを見ると「愛おし
くて涙が出る」と涙を流すような



▲慈眼寺住職 西村宗洋さん
感受性の豊かな方でした。お盆の法要には何か感じるものがあ
ったようで、毎年早めに来られては準備する人の様子を本堂に座っ
て静かに見守っていました。

境内にある「いのちは」という詩を刻んだ碑は私が建立しました。
この詩を選んだのは、作中にある「世界は多分他者との総和」とい
う言葉が、仏教の「縦に繋がる総和」という思想と通じると感じた
からです。吉野さんという狭山市ゆかりの詩人がいたことを、詩碑
を通して後世に残していきたいと思っています。

★常泉寺

樹の目標は何か、完成とは何か もちろん、人は知りもしない。
(「樹木」詩集『陽を浴びて』より一部抜粋)

この地域はかつて武蔵野の雑木
林が広がる自然豊かな場所でした。
境内にもかつてはケヤキや銀杏の
大木があり、散歩をしながら娘さん
たちにケヤキの話をしたそうです。



★野々宮神社

作品の舞台かどうかははっきりと分
かっていませんが、神社内の立派なケヤ
キと銀杏は、吉野さんの自宅から眺める
ことができたそうで、この辺りの竹林も
目にしていたと考えられます。吉野さん
は竹を見てビルを思い浮かべたのか、そ
れともビル群を見て竹を重ねて想像し
たのか。その発想の源に思いを巡らせる
と、興味深く眺めることができます。



光も入らない円筒形の部屋ばかり
〔竹〕詩集『自然渋滞』より一部抜粋

★金剛院

寺の本堂前 銀杏の巨木が 喪服の人の右
に左に 熟した金色の実をしきりに降らせて
いた。(「銀杏」詩集『叙景』より一部抜粋)



吉野弘さんが見ていた風景に触れてみよう

★不老川

両膝をぴったり合わせ脚を曲げたように 堤に生えている榎の二本の幹 (「脚」詩集『叙景』より一部抜粋)
つくし 土筆 光をたっぷりふくませて 光を春になすっています (「つくし」詩集『自然渋滞』より一部抜粋)

吉野さんは不老川沿いもよく散策していたといひます。かつて下流には
「脚」のモデルになった榎の木があり、対岸の住宅付近は春になるとたくさ
んのつくしが芽生える場所だったそうです。「つくし」からは、散歩の途中
に背の高い吉野さんがしゃがみ込み、小さなつくしを優しいまなざしで見
つめる姿が思い浮かびます。



▲つくし(入曾を記録
する会提供)



▲脚(さやま吉野
弘の会提供)
※現在はあり
ません



◀かつての不老川(さやま
吉野弘の会提供)

★茶の花おぼえがき誕生の地

栄養生長と成熟生長という二つの言葉の不意打ちに会った
私は、二つの生長を瞬時に体験してしまった一株の茶の木でも
ありました。(「茶の花おぼえがき」詩集『北入曾』より一部抜粋)

■吉野さんが衝撃を受けた「成熟生長」という言葉



▲さやま吉野弘の会 仲川幸成さん(作中の若旦那・前市長)

詩集『北入曾』にある「井戸端園の若旦那が、或る日、私に話し
てくれました」で始まるこの詩は、私と吉野さんとの会話を基
に生まれた作品です。吉野さんの自宅からは茶畑が見え、私が
茶の木の手入れ作業をしていることを確認すると、よく畑に入
ってきて、作物や育種のことなどを熱心に尋ねてきました。奥
さんから「忙しいのに、何度も伺って申し訳ない」と言われるほ
どでした。

会話の中でとりわけ吉野さんが衝撃を受けていたのは、私が
発した「成熟生長」という言葉です。「茶の木は肥料が多いと花
をつけず、栄養が尽きたり吸収できなくなったりすると花を咲
かせる。花は「終わり」であると同時に、次の世代の「始まり」
でもある」ということを話しました。この自然の営みが、もともと
吉野さんの根底にあった「いのち」というテーマと重なったの
だと思います。

それぞれの場所にちなんだ詩の解説
は「さやま吉野弘の会」が「茶の花文
学散歩」のために作成したものを参
考としています

★入曾地域交流センター
(吉野弘さんの作品の展示があります)

吉野弘 生誕100年記念イベント

茶の花回想録「吉野さんとのおもいでばなし」

吉野弘さんの詩の作品や人柄を演劇で鑑賞できるイベントです。

日時 2月15日(日)、14時～15時30分

場所 慈眼寺(入間川1-9-37)

出演 MTW(ミュージアム・シアター・ワークショップ)

定員 70名

申込み 1月20日(火)、10時から入曽地域交流センターへ ☎2959-3004 (電子申請・電話可)



▲申し込み
はこちら



▲2024年公演の様子



今回のイベントを企画している

「さやま吉野弘の会」の方にお聞きしました！

イベントの魅力を聞かせてください

この演劇作品は、詩やエッセイだけでは知ることのできない、吉野さんの「日常の素の姿」を伝えるため、ご家族や生前に交流のあった方々のお話を基に作られました。演劇という形だからこそ、作品を読むよりも目と耳で触れることができ、吉野さんの人柄がよりスツと心に入ってくるのではないかと思います。

見どころは、今まで一部分のみ紹介していた長い散文詩「茶の花おぼえがき」を全編紹介することです。舞台となっている狭山ならではの場面ですし、朗読ではなく役者が演じることで、吉野さんと狭山の風土との出会いの物語として表現されています。また、会場が初めて吉野さんの菩提寺である慈眼寺となり、役者も一部変更になっているので、前回ご覧になった方にも新しい気持ちで楽しんでいただけたと思います。ぜひ、足をお運びください。



▲さやま吉野弘の会 可児教子さん

演劇を観た方へのメッセージ

観劇後には、ぜひ詩を読み返してみてください。私たちと同じ日常を見つめながら、少し違う視点で言葉を紡いだ吉野さんの魅力がじんわりと伝わってくるはず。そして、何気ない日常の中で「自分だったらどう感じるだろう？」と胸の内に問いかける、小さなきっかけになればうれしく思います。

問合せ 広報課 ☎2935-3765

図書館で手に取れる書籍

吉野弘さんに関する書籍を図書館で借りることができます。詳細は、図書館公式ホームページをご覧ください。作品を通して、吉野さんの言葉の世界に触れてみてはいかがでしょうか。ページを開けば、そっと心に寄り添う一行と出会えるかもしれません。



『北入曽』
(吉野弘/青土社/昭和52年)



『贈るうた』
(吉野弘/花神社/平成4年)



『二人が睦まじくいるためには』
(吉野弘/童話屋/平成15年)



『妻と娘二人が選んだ「吉野弘の詩」』
(吉野弘/青土社/平成27年)

「祝婚歌」

結婚式のスピーチでよく紹介される「祝婚歌」。この詩は、姪の結婚式に出席できなかった吉野さんが、新郎新婦にお祝いとして贈った詩です。

市では、婚姻届を提出された方に「婚姻記念証」をお贈りしています。表面には広報さやまの「さやまの昔話」などでおなじみの池原昭治さんが描いた童絵と、吉野弘さん直筆の「祝婚歌」を載せ、裏面には婚姻届を複写した特別な日を記念する一枚となっています。



皆さん一度は耳にしたことがあるのではないだろうか